文学者と図書館（下）

滝沢正順

（前回は大学図書館で終わりになったが、その続きから始めることにする。）

5

日本で大学としてもっとも歴史の古いのは東京大学であるが、その附属図書館は関東大震災のとき蔵書とともに全焼してしまった。文人・姉崎正治は震災後に東大図書館長になってその復興のために働いた。その様子はたとえば「わが生涯」によって知ることができる。姉崎館長の下には、司書官として仏文学者の山田珠樹がいたが、その妻だったことのあるのは森鷗外の長女で、のちに小説家になる森茉莉である。森茉莉はエッセーのなかにも山田珠樹についてふれたものがあるが、小説の小品「青い栗」には、夫が図書館の仕事でアメリカへいっているとき、家に泥棒が入ったことを書いている。また、震災以前には、俳人の坂本四方太も司書官をしていた。

今あげた館長や司書官は、三人とも東大の教授・助教授の兼任だが、戦前の東大附属図書館には、図書館の専任の職員で、のちに大学の教授などになった人が何人も働いていた。たとえば、仏文学の水野亮、スペイン文学の会田由、民俗学の関敬吾、評論家・児童文学者の吉野源三郎といった人たちである。そして彼らと同僚であった人に小説家の渋川驍がいる。渋川驍は戦時中には妻子を疎開させ、東大附属図書館の宿直室に寝泊まりしていた。散文詩を集めた「柴笛詩集」はこの時期に書かれたもので、そのなかの「日曜日」「友」はこの生活の一面にふれている。

渋川驍は図書館との結び付きは大変に深く、東大図書館の後にも、国立国会図書館、武蔵大学図書館の事務長、東洋大学の図書館学講師、さらに東海大学の図書館学の教授というように図書館人として長いキャリアをもっている。

東大では学内の全部の図書館室共通の月報として「図書館の窓」を発行しているが、その昭和五十二年四・五月合併号は東大創立百年の記念特集号で、先に名を記した戦前の人たちや、その他にも附属図書館（総合図書館）で働いた知名の人の回想が載っていて大変に興味深い。

ところで、太平洋戦争のときには勤労動員というものがあって、学生はこれに駆り出された。昭和二十年四月に東大英文科に入学した吉行淳之介は、勤労動員で附属図書館で働いた。文学青年の吉行淳之介は渋川驍に自作の詩を見せ、それに対して渋川驍もノートに書かれた自分の散文詩を朗読したと、吉行は回想している。渋川驍の朗読した散文詩というのが、「柴笛詩集」と関係あるのかどうかはよくわからない。

東大では附属図書館以外にも該

当する人がいる。木下杢太郎は医学博士・太田正雄としての面ももち、東大医学部教授にもなった。学生としてその講義をきいたことのある加藤周一によれば、木下杢太郎は東大医学部の図書館長でもあり、戦時下に漢籍の医学書を収集したということである。

6

東大の総長を明治三十年から半年間ほどし、文部大臣にもなった外山正一は、「新体詩抄」の著訳者の一人としても知られている。彼は議員として貴族院で図書館に関する法案を提出したことがある。その一つは「公立図書館費国庫補助法案」で、これは議会を通らなかった。また「帝国図書館を設置するの建議案」も提出している。

帝国図書館は、第二次世界大戦後は国立図書館と名を変え、さらに国立国会図書館支部上野図書館となって現在にいたっている。菊池寛の小説「出世」はこの帝国図書館の下足番のことを書いて印象の強い短篇だが、明治四十年から四十四年までここで出納手をしていたのが、演劇評論家の渥美清太郎である。彼は出納手をしたおかげで中学を卒業でき、また在庫の演劇書を全部（といっている）読んだが、当時の出納手は激務であったため、心臓を悪くし、今だにその影響が残っていると、第二次大戦後に書いている。

帝国図書館はこの名になる前に何度か名称が変わっている。また所在地も幾度か移っていて、湯島の聖堂にあったこともある。この時に幸田露伴と夏目漱石がそれぞれここに通ったことがあるのをのちに回想したりしている。湯島の聖堂にあった時期に、名称を東京書籍館といった時があるが、その館長補だった人に、永井荷風の父の永井久一郎がいる。永井久一郎はのちに実業家に転身して日本郵船に入り、上海支店長や横浜支店長をした。彼は禾原という号で漢詩も作り、日本郵船のときには中国の文人たちとも交友があったという。父の死後、永井荷風は自分が主幹をする雑誌に父のアメリカ留学の日記を載せたという。

明治・大正時代、あるいはそれ以前からの蔵書をもつ図書館で、帝国図書館や東大図書館などとともに、貴重な資料を多数もつものに内閣文庫がある。柳田国男は若い時代に、宮崎湖処子の編集した「抒情詩」に詩を載せたことがあるが、内閣書記官室の記録課長であった明治四十三年から大正三年まで内閣文庫の管理をした。その間に庁舎の新築や漢籍目録の出版などに携わったようである。

また今の宮内庁書陵部も貴重な蔵書を多量に所蔵しているが、森鷗外は陸軍退役後に、その前身の一つである、宮内省図書寮の長（図書頭）をしている。このとき鷗外が任じられていたのは「帝室博物館総長兼図書頭」としてで、両方へ一日おきの出勤だった。

7

日本の例ばかり並べてきたが、外国にもそうした文学者はいるので何人かあげることにする。しかしその前に日本人で外国の図書館で働いた人のことを記してみる。

草野心平は中国広東の嶺南大学で学んでいたが、生活のためにいろいろなアルバイトをし、そのなかには図書館での本の貸出の仕事がふくまれている。児童文学の渡辺茂男は慶応大学図書館学科の教授でもあったが、アメリカで大学院を出たあと、ニューヨーク公共図書館に勤めている。本館だけでなく、スタットン島・ブロンクス・ハーレム（黒人ゲットー）といろいろな分館をめぐったと書いている。あるいはまた、大庭みな子の「オレゴン夢十夜」にはアメリカの大学図書館につとめる日本人女性が出てくる。彼女はアメリカ人と共同で大庭みな子の作品の英訳もしている。彼女はその大学では図書館で働くほかに図書館学の講義もしている。またアメリカの議会図書館で働いたこともあると記されている。

8

外国の文学者で図書館というと、ストリンドベリやレッシング、最近ではボルヘスが有名である。ストリンドベリがスウェーデン王立図書館に勤めていたのは二十歳代から三十歳代はじめにかけての八年間ほどだが、最初の妻シリ・フォン・エッセンと出会ったのはこの時期である。「痴人の告白」の冒頭はスウェーデン王立図書館であり、そこでのストリンドベリは、図書館での昇進の可能性も少なく、自作の戯曲の上演の見込みもないため厭世思想にかぶれていったというふうになっている。

渡辺茂男のいたニューヨーク公共図書館には、かつて詩人のマリアン・ムーアも働いていたことがある。ムーアの詩の多方面の知識を、図書館で働いたことと結び付けることもあるようである。

イギリスの小説家、アンガス・ウィルソンは第二次世界大戦の前後約二十年間を大英博物館に勤務した。戦後の彼の仕事はドイツ軍の空襲で焼失した三十万冊の本を補充することであったという。

十八世紀にさかのぼると、たとえば、長大な回想録に描かれた波乱にとんだ生涯で知られるカサノヴァが、晩年にボヘミアの貴族の城の司書をしている。回想録はこの時期に書かれている。

また、日本では言語学者というより童話の方で一般になじみのあるグリム兄弟も、図書館員であったことで知られる。図書館員としては、最初は兄の方だけがヴェストファーレン王であったナポレオンの兄・ジェローム・ボナパルトの図書室で、そのあと二人ともカッセルのヘッセン選帝公図書館、さらにゲッティンゲン大学図書館で（教授としても）働いている。苦労した時期もあったようで、たとえばゲッティンゲン大学図書館に移って間もない頃の兄の書簡の一部。

「カッセルでは、私は自由な人間でしたが、ここではくびきにつながれた奴隷のような気がします。この図書館はたえず回転する車輪で、それを私はまる六時間踏まなければならないのです。仕事に対する内心の喜びなしに」（高橋健二「グリム兄弟・童話と生涯」小学館、より）。

外国をヨーロッパに限っても、有名な文学者でけっこう該当する人が見つかる。フランスなら、ノディエ、ミュッセ、サント・ブーブ、フローベール、アナトール・フランス、プルースト、バタイ

ユ、等々。イギリスの詩人、フィリップ・ラーキン。ドイツの詩人、ヴィルヘルム・ミュラー。オーストリアの「特性のない男」のムージル。スペインの劇作家でフランスに亡命したモラティン。ポーランドの小説家、ジェロムスキ。ルーマニアの詩人、エミネスク、等々。

日本の隣、中国にもたとえば沈従文。文学者とはいえないかもしれないが、詩を書いたり、影響の大きかった「文芸講話」の毛沢東。毛沢東の始めた「文化大革命」のとき、図書館の書庫で働かされたという陳荒煤。

探せばもっと多数にいるのだろうが、切りもないのでとりあえずこの辺で終わりにしたいと思う。

（東京大学機械工学科図書室）